

歴史上の人物を踏まえた「禅と日本文化」(鈴木大拙著)講読会

【講座概要 第5回～第7回】

第5回 5/24(火) 第3章／禅と武士①

第6回 6/28(火) 第3章／禅と武士②

第7回 7/26(火) 第3章／禅と武士③

「武士は桜の花の如く、死に際していさぎよく散るべきである」。

学問や芸道のいずれの分野にも属せず、しかし一番色濃く日本文化を代表するのが武士道ではなかろうか。

大拙はまず、日本に禅と武士道が生まれ、歩調をそろえて発展していった、その歴史的同期性に着眼しつつ、“生死を離れ”“今を最大限に生き切る”不屈の精神性を基調低音として、禅と武士の相関を様々なテキストを駆使して語り尽している。

北条氏をはじめとする鎌倉武士とは何か。

そして戦国期の二大英雄、上杉謙信と武田信玄の生きざまとはどのようなものであったか…。

さらに、武士以上に毅然として豪火の中に入寂した禅僧、快川和尚の軌跡をたどっていく。

武士道なくして、日本に禅なし。

禅なくして、日本に武士道なし。

そのいわれを、中世の武士と禅の傑僧の実像を通して探り当てていきたい。

1. 禅と武士は、なぜ結びついたのか

歴史的に見て、仏教はかつて戦と関係しなかった。なぜ、禅だけが武士の戦う精神と結びついたのか。

↓

①禅は道徳と哲学の2つの方面から武士を支援した。

道徳：一度道を踏み出したら、禅は決して振り返らないことを教えるから。

哲学：禅は、生と死を切り離して考えないから。

禅は意志の宗教だから、哲学よりもいっそう道徳的に武士道精神に訴えるのだ。

【学びのポイント】 宗派による教義の違い

・易行、他力 → 浄土宗

・難行、自力 → 禅

②禅は単純、直截、自恃、克己的である。

戒律的な傾向が武人の精神とよく合致する。立派な武士は禁欲的、自肅的である。

↓

武田信玄、上杉謙信（葉隠武士道）

③禅と武士がともに発展した、歴史的必然性があった。

旧仏教が支配する京都ではなく、北条氏が拠点とした鎌倉には、貴族や旧仏教の地盤がなく、禅と武門はともに発展し、様々な日本文化成立の影響力となりえた。

④禅は武士のみならず、どのような新しい層とも柔軟に結びつく

- ・禅は特別な理論や哲学を定めない
- ・すなわちどのような考え、信条とも相容れる
- ・禅はいつも革命的精神の支援者である

「天台は宮家、真言は公卿、禅は武家、浄土は平民」

（平田篤胤「天台天子、公家真言」より）

2.北条氏と禅の結びつき

[1.北条時頼]

北条家の最初の参禅者は、五代執権北条時頼である。
京都から鎌倉へ禅僧を招く。さらに中国からも高僧を招いて禅の奥義を会得した。

・時頼の師： 中国の禅僧、兀庵普寧

[2.北条時宗]

・時頼の次男、第八代執権北条時宗は、日本が生み出した中世最大の偉人。
執権在職中に日本最大の危機である「元寇」に立ち向かい、これを撃退した。
元寇で戦死した日中両国の兵士を弔うため、仏光国師(無学祖元)を招き、円覚寺を開山した。

仏光国師と時宗の問答は、時宗の禅に対する丹誠をよく理解させる。

時宗:いかにして、我が諸々の思念と意識を断ち切れますか。

仏光:座禅を組め。時宗自身に属すると思う、一切の思念の源に徹底せよ。

時宗:私は俗事がたくさんあります。瞑想の暇が見つかりません。

仏光:俗事に携わろうとも、それを内省の機会として取り上げよ。いつかは汝の内なる時宗の誰であるかを悟るであろう。

時宗は、禅により国難を退けた、偉大な精神をもつ修行者であっただけではなく、後世、室町時代に最盛を迎える、日中貿易の端を開いた最初の権力者でもあった。

3.『葉隠』の武士道

時頼、時宗等により、禅が深く武士階級へ浸透していき、武士と禅の精神的協力が生まれた。ここに武士道が創造されていったのだ。

武士たる者は、忠孝仁義の精神をもたねばならない。この精神を保ち、武士道を実行するためには、日常的に鍛錬を続け、[常住死身](葉隠より)を覚悟しなければならない。

・参考:『葉隠』とは

江戸初頭、佐賀鍋島藩士、山本常朝と田代陣基により、筆録、編纂された聞書体裁の佐賀鍋島武士道語録である。

全11巻、1300話にもおよぶ膨大な武士の逸話、伝聞を収録したもので、「武士道というは死ぬことと見つけたり」の句で代表されるように、死を恐れぬ強靱な鍋島武士の生きざまを伝えている。大拙の紹介文にもあるように、全編を通して禅の影響が深く感じられる、武士道の聖典である。

武士として、いかなる偉大な仕事も狂気にならずして(葉隠でいう“死に狂い”)成就したためしはない、としているのだ。

以下、大拙は『葉隠』より、いくつかのエピソードを引用して、禅と武士道の強い結びつきを例示していく。

①柳生但馬守と剣術指南を乞う、ある旗本の逸話

但馬が達人と見立てたその旗本は、実は剣術を習得したことはなく、ただ心の修行により、「いかなる時も、死を恐れなくなった」境地に到達した者であった、と判明したのである。

②元旦の朝から、大晦日の終わりまで、一年中念頭に死を持ち続けなければならない。日々これ、「わが最後の日」と考えることで、一切の雑念を去り、一切の災難を避けて、武士としての義務を十二分に果たすことができるようになる、と説く。

(『武道初心集』)

③武士道というは、死ぬことと見つけたり。二つ二つの場にて、早く死ぬ方に片づくばかりなり。

④塚原ト伝の逸話

「兵法のかなめは、ただ身を捨て、敵を討つべし」

「皮を斬らせて肉を斬れ、肉を斬らせて骨を斬れ、骨を斬らせて命をとれ」

「真剣(勝負)は、わが身を殺されに行く、と思はねば勝つことは出来申さず候」



これらの武士道書の思想は、禅による「無心の境地」に入ることをとっている。

それはもはや、死とか不死とかの問題に煩されぬ心の在り様をいうのだ。

(沢庵禅師)

4. 上杉謙信・武田信玄と禅

謙信は越後、信玄は甲斐。その領土が接していたため、二人の武将は生涯にわたって戦わねばならなかった。

武略・戦術の研鑽と共に、禅に深く帰依することでも、両雄は競い合ったのである。

・上杉謙信の参禅の師 → 益翁宗謙

越後、林泉寺住持(曹洞宗)

・武田信玄の参禅の師 → 快川紹喜

甲斐、恵林寺住持(臨濟宗 妙心寺派)

① 謙信と益翁

・禅の知識のある謙信が、益翁から「達磨不識」の公案を与えられ、答えられなかったことから、帰依するようになった。

・以降、師のもとで禅修行をし、「生を必する者は死、死を必する者は生く」(『葉隠』参照)の訓戒を家臣に遺した。

・謙信の辞世の偈

「一期の栄華一盃の酒。四十九年一睡の夢。生は知らず死もまた知らず。歲月はただ

これ夢のごとし」

②信玄と快川

・信玄は恵林寺を再興し、快川のもとへ熱心に参禅した。『信玄家法』には、「参禅は別に秘訣なし。ただ生死の切なるを思ふ」とある。

・織田軍の恵林寺山門焼き討ちに際し、快川は「心頭滅却すれば火自ずから涼し」の偈を遺し、火定三昧に入った。

・自然を愛する信玄は、快川に恵林寺の花見へと誘われ、「さそはずばくやしからまし桜花 さてこん春は雪のふるてら」の歌を詠んで送った。

・信玄の辞世の歌
「大底は他の肌骨の好きに還す。紅粉を塗らずして自ら風流」

【ワンポイント禅①】 武士道と辞世の歌

浅野長矩、大石内蔵助、秀吉、家康、利休 → 参照【言の葉庵】辞世の句

5. 鎌倉武士の死

①北条高時の家臣の切腹(『太平記』)

鎌倉幕府滅亡に際して、主君に殉じた武士の死にざまは、先の快川和尚の場合と同様、潔く後の武士道に大きな影響を与えた。

②長崎次郎高重の死

禅匠の教えに、生死を超克し、鎌倉武士としてもっとも勇敢に戦い、討ち死にした。「日本人は思い切り悪く、ぐずぐずして死を迎えることを嫌う。日本人の死に対する態度は、禅の教えと一致した。

日本人は生の哲学はもたないが、死の哲学は確かにもっている」

【ワンポイント禅②】 禅語

上の二話に共通する禅語

「吸毛用い了って、急に須く磨すべし」

◆参照文献

『国際観光ガイドの基本知識 2016 版』水野聡

『日本漢詩選』北条時頼 遺偈 頌

『臨刃偈』無学祖元

『武蔵塚原試合図』月岡芳年(画像)

『葉隠』山本常朝/田代陣基 岩波文庫他

『武道初心集』大道寺友山

『竹馬抄』斯波義将

『甲州法度次第』武田家書

『甲陽軍鑑』徳間書店他

『謙信家記』上杉家書

『太平記』岩波文庫他

『碧巖録』雪竇重顕 岩波文庫他

『景德伝灯録』禅文化研究所他

他